

# 地域力は田舎力

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授  
一般社団法人 洗楓座 代表理事

佐藤 建吉

ロンドンから30キロ以内、ヒースロー空港から10キロのテムズ河畔にある広大な緑地のラーニミードは、1215年にマグナ・カルタが調印された地である。1994年秋、その地を見下ろす高台にあるブルネル大学の寄宿寮で半年過ごした。その後、勤務先の大学の駅前にあった居宅から、

電車で1時間の千葉県東の太平洋側、外房に引越して、20年になる。自然のなかで暮らしたいと思っただけである。

私が考える田舎の魅力を挙げると、第一に自然、第二に天空率、第三に静寂、第四に人間味である。自然の魅力は、山

里・川里・海里の風景であり、また、そこが産み

出す食材の新鮮さや旬の味わいが大きい。天空率は、文字通り地から空を一望できる開放感や自由さである。静寂感とは、夜の静かさのほか、星空の美しさと神秘さがある。

自然の中の間としての存在感や顔見知りの安心感もある。

東京の夜景をヘリコプターで遊覧したことがあるが、人工の光の輝きは確かに百万ドルの夜景ではあるが、月や星々の演出とは異なる。人工の空間に対し、田舎の夜景は自然がつくったアノニマス(無名性、無作家性)ともいえる。

さて田舎には、水力や風力、そして太陽光や太陽熱などのいろいろのエネルギー源がある。これは、本紙が全国からの情報として伝えている新エネルギーであるが、自然に根ざしたエネルギー

であり、地域エネルギーとも呼ばれる。

私の所属する洗楓座は自然エネルギー利用を推進する団体で、「洗」のさえずりが水力を、光が太陽光を、「楓」のきへんがバイオマスを、風が風力を、「座」の土が地熱を、意味つけている。

自然エネルギーは、分散型エネルギーとも言われるものでもあり、土地柄が現れる。自然エネルギーは、エネルギー密度が低いと言われ、また天気に作用されるなど、短所であると指摘する人も多いが、長所であるともいえる。それは安全であること、また、賦存量(ポテンシャル)が極めて大きいからでもある。いま重要なことは、これらのエネルギー利用を進めることではないだろうか。

提案としては、その利用に際して、あまり効率、効率とは言わないようにしたい。効率は出力

／入力の割り算が与える値であるが、どの自然エネルギーも分子の入力の賦存量は莫大であり、この割り算はゼロとなり、意味がないのである。むしろ分子の出力を取り出す努力をする方がいい。

それは、自然エネルギーを適用し、利用することに目を向けることである。千葉県で昨年、昭和初期から昭和35年まで稼働し、その後眠っていたその施設の上池、下池を利用し、今日的な小水力発電所に再生させた例がある。最大出力130キロワットの面白峡発電所(千葉県大多喜町)である。ここは、養老川という溪流の温泉地でもある。この地域は、未整備の森林も多い。これらを活用して自然エネルギー利用を進める地域に、洗楓座が関わり実現したいと考えている。

田舎は、いまこそ豊富な資源が眠る自立可能なエネルギーの宝庫であると言える。地域エネルギーは、文字通り、「地域力」であり、それは、田舎の持つ「田舎力」である。それは、また、持続可能革命を先導する地方創生のパワーでもある。



新旧の送水管(面白峡発電所、大多喜町)